

山行報告書

山行名		'97 春山合宿S隊 ・ 山スキーと登山		報告者	高岡 八千代	
山名		剣岳 (2,998m) ・ 立山・ 剣沢・ 雷鳥沢・ 御山沢				
コースタイム 及ム	日付	裾野 5:30 ⇒ 御殿場 6:00 ⇒ 扇沢 9:30 ⇒ トロリーバス 11:00 ⇒ 室堂 13:00				
	4・26 (土)	雷鳥沢キャンプ場着 14:30				
標高差	△S室堂～T雷鳥沢キャンプ地	=	m	体力度	1・2・3・4・5・⑥	
	▼T～G	=	m	技術度	1・②・3・4・5・6	
走行距離	～	=	Km	展望度	1・2・3・④・5・6	
参加者	後藤 50	久し振りの剣は笑顔だった	高岡 60	口も聞けない重さに閉口		
	来生 48	お父さんの方がよっぽど軽い	加藤 48	35K の荷物は半端じゃなかった		
第1日目 (快晴)	<p>扇沢まで3時間半。オリンピック道路のお蔭で予定より早く到着する。荷物をそれぞれに分けてトロリーバスに乗る。荷物の重い事。手にはスキー板とスキー靴。これでテント場まで行けるかと心配になる。トロリーバスを降りた所で荷物の検査。計りにかけたら27Kもある。びっくり！スキー板とスキー靴をあわせると35Kはあるだろう。大丈夫かなあ～と思っているとCLの方は私達より更に7～8K重い。やっぱり凄い。強いなあ～。感心する。重い等と愚痴をこぼしてられない。頑張っ行ってこうと心に決め、ケーブル、ロープウェイ、トロリーと乗り継いでいく。</p>					
	<p>やっと室堂に着いた。凄い雪。外に出ると見渡す限りの雪山。アルプスの山々が待っているよと言っているようだ。山を見ていると『さあ出発』とCLの声。これから雷鳥沢までどのくらいかかるのだろうと思いながら歩き始めた。雪の中をヨタヨタしながら1時間半やっと到着した。すぐテントを張り、水を汲み（雷鳥沢テント場はすぐ近くに水洗トイレがあり、水場もある。とても綺麗にしてあった）準備を整えてから、食事の時間には未だ早いから・・・とスキーの練習をする事になった。CLと加藤は山の上から滑る為、板を担いで山の方へ。来生と私はテント場の近くのなだらかな斜面で練習。見渡す限りの雪原。自由自在に何処を滑ってもOK。すごいスキー場だ。こんなに素晴らしい所でスキーの練習が出来るとは夢にも思わなかった。スキーはなかなか上手にならないけれど何時の日かCLと加藤の後からついて行けるようになりたいものです。2時間程滑って5時食事。</p> <p>今回は買い過ぎた食料をどうやって減らしていこうか・・・等とワイワイ言いながら、取敢えず明日からの山行に乾杯！憧れの剣岳に乾杯！高鳴る胸を静めながら、20時に床につく。</p>					

山行報告書

山名		剣岳 (2,998m)		報告者	加藤 秀子	
コース 及 タイム	日付	起床3:30 雷鳥沢キャンプ場出発 5:00 ~別山乗越 6:15 ~剣山荘 7:15 ~ 剣岳10:15 ~剣山荘13:35 ~雷鳥沢キャンプ場着15:45				
	4・27 (日)					
標高差	△S雷鳥沢 2,277	~T別山乗越 2,755	≒ 478 m	体力度	1・2・3・4・5・⑥	
	△T別剣山荘 2,465	~G剣岳 2,998	≒ 533 m	技術度	1・2・3・4・5・⑥	
				展望度	1・2・3・4・5・⑥	
参加者	後藤 50	柳ちゃん の供養が出来て良かった	高岡 60	もう一度行きたい		
	来生 48	今年中にもう一度アタック	加藤 48	今度は早月尾根に挑戦してみたい		
第2 日目 (快晴)	『ハァハァハァ』『ガツッ、ガツッ、ガツッ』 ピーンと張り詰めた神経のなかで、荒い息づかいと雪を蹴り込む音だけが耳に響く。頂上は目前だ。 憧れの剣岳。1年前入会して間もなく、会から戴いたカセットテープの中に剣岳の歌が入っていた。歌詞と哀切を帯びたメロディに何故か心ひかれ、何度となく聞いているうちに剣岳へのイメージが膨らみ資料を集めた。岩と雪の殿堂「剣岳」との見出しのカラー写真に、ガーンと頭を殴られたような衝撃的な出会いだった。それから「何時か必ず登るんだ」と心に決めていた山である。この歌が7年前剣岳で遭難した三島芳山の柳下さんを偲んでCLが作詩作曲した追悼歌であると聞いたのは後の事であった。					
	<p>5:00 テントの外はもう薄明るい。見渡す限りの白一色の世界に澄みきった空気が清々しい。奥大日岳、立山連峰の稜線がくっきりと描いたように際立っている。キャンプ場はまだひっそりと寝静まっているのか人の気配がない。その中を踏む度にバリバリ音をたてる雪面を気にしながらCL・来生・高岡・加藤の順で出発する。</p> <p>すぐに雷鳥沢の登りだ。急登だが階段状に踏み跡がしっかりついていて登りやすい。振り返ると雷鳥平キャンプ場の色とりどりのテントがまるでお花畑に咲いた花のようだ。1時間程登りつめた稜線に入った所で、未だ冬毛で白い2羽の雷鳥の出迎えを受ける。CLがカメラを向けると、トットトットと逃げ腰になるが又直ぐ近くに寄ってくる。その愛らしさに皆の顔が思わずほころんだ。</p> <p>まもなく別山乗越。剣御前小屋を抜けると目前に初めて「剣岳」がその神々しい姿をあ</p>					

らわす。『凄い！』思った通りの険しい岩峰に歓声があがる。その奥には鹿島槍、爺ヶ岳、五竜と錚々たる山々が軒並み連なり圧巻だ。興奮する女3人とは反対に、CLは剣岳の一点を無言で見つめ感無量の表情をしていた。剣沢の緩やかだが長い下りは軽快で剣沢小屋手前になった所で左にトラバース、剣山荘を過ぎ剣御前からの稜線沿いの道と合流すると間もなく一服剣。一旦武蔵コルの鞍部まで下り前剣を目指す。雪壁が眼前に迫りその急峻な雪壁に武者震いがでる。急登を喘ぎながら詰めるとそこは前剣。

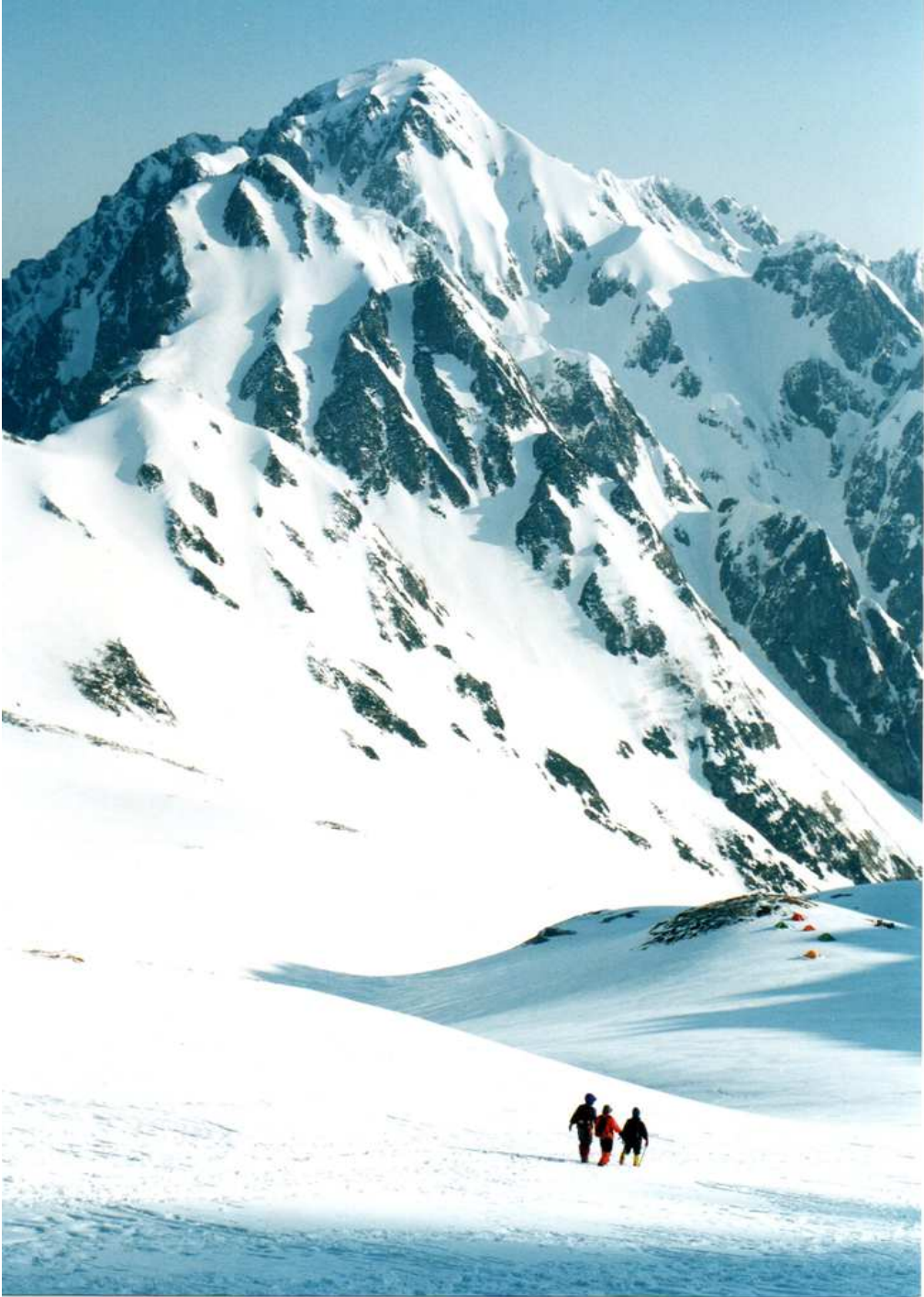
ここは柳下さんの遭難した場所だ。崖淵の所は風が強い為か雪はなく、岩がゴツゴツと突き出ている。滑落した場所を暫く覗いていたCLの辛そうな表情が痛ましかった。去来するものは何か想像を絶するが、険しい岩稜の下からはただヒューヒュー風が泣いていた。遭難した後で作ったというプレートはもっと上なので、近くの石を見つけて持参したお線香とお花を手向け、皆で手を合わせる。『今年は丁度7回忌にあたるから来たかったんだ』と呟くCLの姿に『遭難は絶対あってはならない』と心に刻みこんだ。

と、突然来生が『私ここで止めておく。これ以上無理だと思うから』と言いだした。『折角此処まで来て勿体ない』という私達に『でも此処まで来れた事で充分満足。後悔はない。小屋で待っているから行っておいで』と清々しい表情。その心をくみとってCL・高岡・加藤の3人はハーネスの身支度をし、来生を残していよいよ雪壁にとりついた。

直雪壁にピッケルを突き刺し、アイゼンを思いっきり雪の壁に蹴り込む。クラストした雪は少しでも滑ったらアウトだ。奈落の底が口を開けて待っている。ピッケル・足・足、1・2・3と口にしながら一心不乱に登る。神経をピンと張り詰めてアイゼンの爪に集中させる。蹴り込みが浅いと「ズリッ」と雪がながれ、慌てて雪を掴むか掴み所のない雪に手が躍る。心臓が縮む思いの雪壁だった。

やっとの思いで平蔵のコル。先行者の男2人組はハーネス、ヘルメット、ザイルを肩にかけ本峰南壁登攀の準備をしているようだ。南壁の岩稜は垂直に切り立っている凄い場所だ。見たところ熟練者のようだが「大丈夫かなあ」と横目でみながらトイレ休憩。何時も感じる事だが男性はいい。「キジ打ち」と言って何処でも用が足せる。女性は「花摘み」と言って表現は綺麗だが人目をはばかる。雪の上の狭い場所では如何ともしがたい。左側の崖淵へ行ってみる。下は岩の突き出た絶壁だ。が1・2歩下った所に格好なる場所を見つけた。恐る恐る下り、用を足したか絶壁を見ながらでは足元は落ちつかず、おまけに激しい風が吹き抜けてたまったものではない。やっぱりトイレは地についた安心できる場所がいい。

ここから私達は避難小屋を左に巻いて『カニの横這い』と呼ばれる鎖場に向かう。雪壁や雪が混じる岩稜帯は険しく、足元も心もとないが鎖やボルトがしっかり固定されているので、三点確保の基本さえしっかりしていれば思った程悪くない。結構楽しめる岩場だ。然し狭い足場





であるから、アイゼンを岩に引っ掛けないように慎重に足を運ぶ。登り切った所で『見えた！頂上が！』歓声があがる。『あと一息だ！』CLの言葉に俄然足が早くなる。

やがて左からナイフリッジの早月尾根が合流すると剣岳。頂上は狭い。祠は屋根のみ僅かに露出しているだけの深い雪だ。頂上からは、険しい山に似つかわしくない流れるような雪の稜線。その向こうには幾重にも折重なった山が墨絵のように濃淡で浮き上がる。素晴らしい眺望だ。高岡は『まさかこの年になって剣に立てるとは思わなかった。嬉しい！』と雪やけで真っ黒になった顔を涙でグシャグシャにしていた。本当に感無量であった。憧れていた剣に立つことが出来たんだ。山を始めて丸1年。『残雪の剣ができるようになるのは後3年かかるな』とCLに言われてきたのにとうとう登ってしまったんだ。そう思うと胸に熱いものがこみ上げてくる。歌のイメージその儘に、ピッケルをかざして写真に収まり、一つ私の夢が叶った。ふと気がつくと源治郎尾根にとりついていているらしい人影がみえる。恐竜の背中のようなギザギザと切り立った岩稜のバリエーションルートだ。『半端じゃあ登れないよ』とCL。その言葉に重みがあった。

順調に平蔵のコル迄下りここで一服。CLが来生に無線をとるか交信できない。私は不安がつる。CLは続けて7年前の遭難事故でお世話になったという富山の安村さんに連絡をとるがこれも又交信とれず、立山町の「ひえない」という方と無線が繋がる。遭難事故の事も安村さんの事も知っており、『こちらは結構ひえますよ』とCLが冗談を言いながら暫く会話を楽しんでいた。本峰南壁を見上げると、先程の2人組がまだ登攀の最中だ。難しいのか距離をあまりかせいでいない。

『さぁーこれからが本番だぞ』CLの言葉に下を覗くと、登ってきた筈の壁があまりにも急峻で真下が見えない。鋭利な刃物でスパッと切ったような前剣の直雪壁に肝を潰す。『登る事は出来るか滞りが問題だ。』登る時に言っていたCLの言葉の意味がよくわかった。ザイルを出しハーネスにブーリンで結ぶよう指示があるが、気が焦って上手く結ぶ事が出来ない。『現場でもたもたしてどうするんだ。話しにならないぞ！』CLの容赦ない激が飛ぶ。トップで降り始めるが、直に立てかけた梯子を下るようなものだから足元がおぼつかない。雪壁を背にして下るとアイゼンの蹴り込みが上手くいかず、ズリッと滑って思わずザイルにしがみつく。

『急下降の場合は登る時の恰好で下るものだ』と教えられ、身体を雪壁に向けなおし、『これでもか、これでもか』と夢中で雪を蹴り込みザイルの先端まで下る。丁度突き出た岩があり、其処で待つ事にした。続いて高岡。しっかりした足どりで慎重に下って来る。最後にCL。

続いて40mのザイルに予備ザイルを結び長さを調節してトップで下る。が、ザイルの終わる所に丁度いい場所が見つからない。壁を蹴り込み足の置き場所を作って待つが、ザイルを離れた後ではとても心細くピッケルに命を預ける。滑らないよう爪先に力を入れているうちに足が

痺れ始め、しんどい事この上ない。高岡・CLと無事に通過し剣山荘で待っていた来生と合流。来生の元気な顔を見てひと安心。来生の話しでは、私達の登って行くのを確認してから下りはじめたがチョット後ろを振り向いた時に単独者が直雪壁で滑り落ちるのを目撃。アッという間の出来事で、『かなり下迄落ちたようだけれど、どうやら足を痛めただけで済んだらしい。びっこを引きながら歩き始めたから』・・・とかなり興奮して、私達の無事生還を涙ぐんで喜んでいた。肩を抱き合って喜びを分かちあう。

剣沢の長い登り返しに喘ぎ、直ぐに団子になる雪と格闘しながら別山乗越まで我慢の子。剣御前小屋からBCが見えた時、初めて『あぁー登ったんだ』、と実感する。満足すると同時に『とうとう剣を登ってしまったんだ』と不思議な寂しさがこみ上げてきた。充実感と寂しさが交錯し何ともいえない気分になる。乗越迄くると、スキー板を担いだ登山者が目立ってきた。乗越からきつい斜面の雷鳥沢を滑っていくのだろうか。小屋で登頂祝い用のロング缶ビール5本（1本700円）仕入れた。

別山乗越からのだだっぴろい急な斜面は、見るからにシリセード（尻制動）にもってこいだ。歩くと1時間20分はかかる。『これは尻制動でいくしかないね』と雪の上にお尻を降ろしてみる。滑りやすいように両足をあげて背を少し倒すと途端にシャーッと滑った！滑った！面白いように滑る。尻滑り？に興じる私達を、目を点にして見ていた登山者がいたが気にしない。横目で通り過ぎ、アッという間にBCに着いてしまった。雪が腐り始めていたのでズボンがびしょ濡れというおまけつき。テントの外でお日様にお尻をむけ日向干しという羽目になってしまったが気持ち良かった～。燦々と降り注ぐ陽光しの下で『カンパ～イ！』シュッワーと溢れる泡に喉を鳴らし小気味のよいホップが身体の隅々にいきわたる。至極の一時だ。

ハードで長い一日が終わった。夕餉の焼肉に舌包みをうち、ビールで乾杯しながら剣岳の話に花が咲く。『苦あれば楽あり』とCLに励まされ登っていた来生が、『苦あれば苦あり』だったと訴えていたのに全員で大笑い。明日の天気はどうか。崩れる予報に晴れて欲しいと祈りつつ、疲れも手伝って20時にはシュラフにくるまった。

備
考

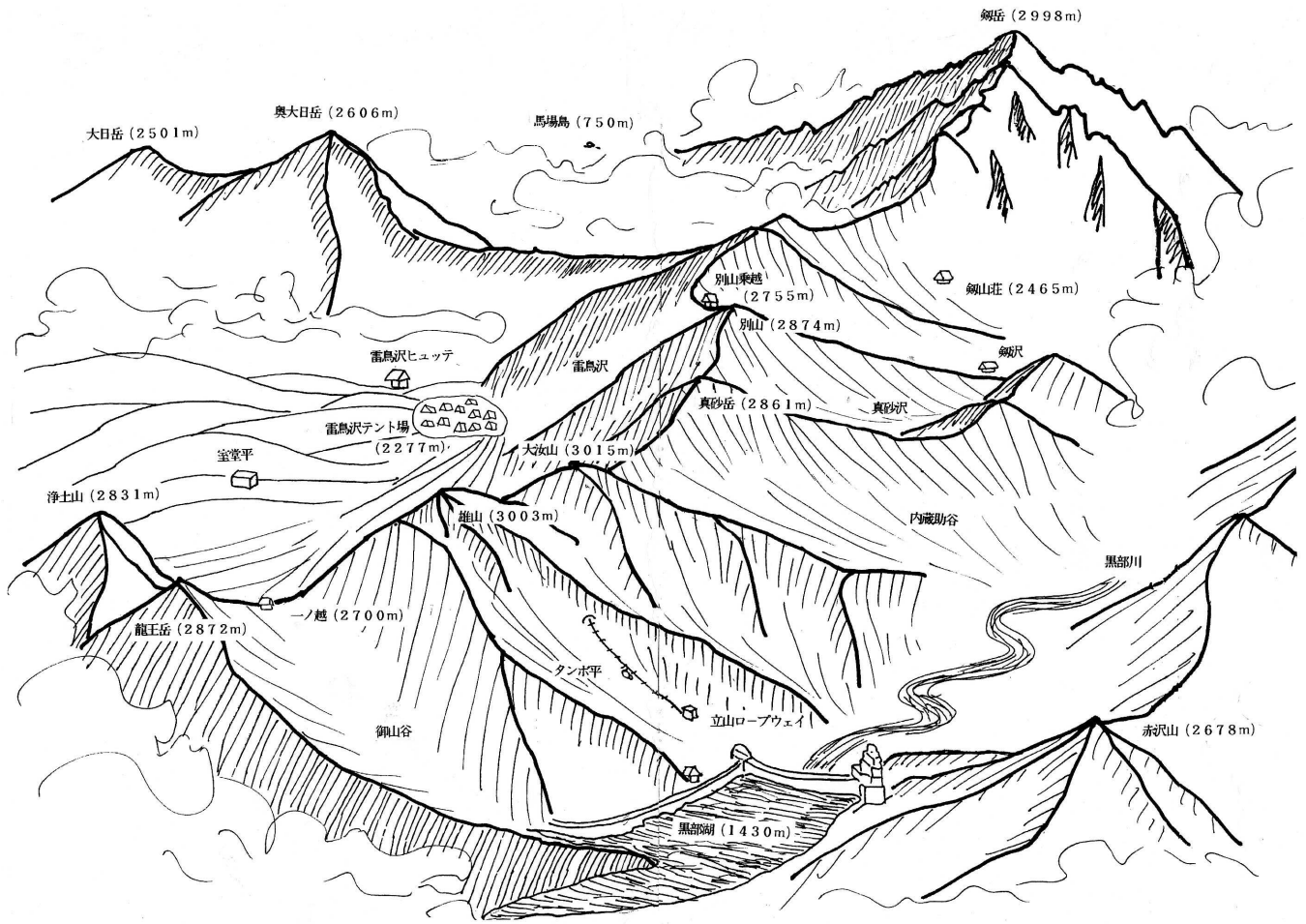
1. 今山行の流行語はシュフレス（主婦レス）＝あまり主婦業に専念していない方、もしくはおおよそ主婦らしくない方の事をいう。『主婦デス』がなまってこうなる。
（言葉に語弊があるけれど、今山行に参加した3人の主婦の中には決していない）
2. 沈殿（停滞）のテントの中で ♪夜と朝のあいだにひとり～のわ～た～し～・・・♪の歌手は誰か？でまたまた賭け。KとKは美川憲一、Gはピーターでまたまた賭けで勝った。そのお金で最終日、大町で痛飲。サイコーの味だった事は言うまでもない。もう音楽での賭けはGとはしないとKとKがくさっていた。



4月の剣岳は、雪が凄かった



1989年、M 労山のY君が遭難死した、
怖ろしい、前剣の雪壁
ここは要注意である



大日岳 (2501m)

奥大日岳 (2606m)

馬場島 (750m)

剣岳 (2998m)

別山乗越 (2755m)

鉢山荘 (2465m)

別山 (2874m)

雷鳥沢ヒュッテ

雷鳥沢

細沢

雷鳥沢テント場 (2277m)

真砂岳 (2861m)

真砂沢

室堂平

大女山 (3015m)

浄土山 (2831m)

雄山 (3003m)

内蔵助谷

龍王岳 (2872m)

一ノ越 (2700m)

黒部川

タンホ平

立山ロープウェイ

御山谷

赤沢山 (2678m)

黒部湖 (1430m)



剣岳頂上
祠が少し見える



夏と比較
2014. 09. 08撮影

山名		劔沢・雷鳥沢山スキー		報告者	後藤 隆徳						
コース及 タイム	夕月 28日	起床 4:50 ~ 出発 7:10 - 別山乗越 8:30 ~ 劔沢小屋下									
	天候 (曇り) 雨	(標高 2465 m 地点) 9:10 ~ 25 別山乗越 10:15 ~ 25 雷鳥沢 B.C 11:00 (泊)									
標高差		△ 雷鳥沢 2277 ~ 別山乗越 2755 = 478 m	体力度	1	2	3	4	⑤	6		
		■ 2465 地点 ~ 別山乗越 2755 = 290 m	技術度	1	2	3	4	5	⑥		
走行距離		~ = Km		展望度		1	2	3	4	5	⑥
参加者・役割	CL	後藤 隆徳	50	夢の劔沢でのスキー。次回は真砂沢にトライしよう。							
	SL	加藤 秀子	48	全山が山スキーエリア。素晴しかった。							
	記録										
	会計										
	医療										
		会員 2 名・一般 名・全体 2 名									
第3目録	<p>高山の山スキーはあまり早く行っても雪がガチガチなので。出発は登山よりも吹雪である。しかし、今日の天気は午後から雨なのでその心配も出来ない。昨日の劔岳登山の疲れを感じつつ雷鳥沢の急登を行く。途中下山の年配の方と情報交換。2人は昨日源次郎尾根をやったと言う。年は58と52才。いやや驚いた。別山乗越ではもう雪がチラチラ。劔岳はまだ見えるがハッキリしない。これでは計画の真砂沢はとても無理なので2案の劔沢に変更する。</p> <p>ゆっくりできるのが滑降開始。しばらくは足がまだ登りの感覚なので上手に滑れない。加藤に先行してもらい劔岳をバックに撮影。スキーは動きが速いので案外難しい。上部の荒れた硬い所をこらすと滑り易くなる。右に別山。左に劔御前。正面に劔岳の大ボウラ。3千mの山の井戸の底のような劔沢はすおびりヨロッポアワツの米河を思い出させた。我々の山スキーもこまで来たナと感慨をひとしお。振むくとスノーボードが2人。こまで来てスノーボードをやるにはある程度山が出来ないと無理だ。もう山スキーもそうである。スキーというと軽く見られがちであるが、実は登山以上にハードでキツイ。登山とスキーの装備を背負いスキーで登り滑る。並の体力では出来ない。しかしケレテスキーでは絶対体験出来ない何かがある。登山と同じで一度やたらハマる人種がいるのだ。</p> <p>劔は急激にガスってきた。目をこらすと源次郎尾根に2人いる。雨は時間の向問題なので劔沢小屋下で終了。小休後シルをつけ登り返す。雷鳥沢より傾斜がかなり分業だ。再び別山乗越。やはり雪がチラチラし風も強い。これから滑る雷鳥沢は厳しい傾斜だ。その上ガチガチの雪。のせいで人対人を持って歩いている。安全棒で横滑りでこらす。歩いている人はかなり年配の方だった。単独で毎年劔に来ると言う。「あ、幾つですか?」と聞くと「幾つに見えます」という。「うーん、58才位」という。もう少し上とのこと。50才位ではマダマダハナタレである。</p> <p>雷鳥沢の下部は左に逃がすと荒れてなく超快適だった。B.Cに着くと同時に大雨になった。</p>										
自然の記述	<ol style="list-style-type: none"> 1. 劔沢に大きなハエ (通称 ベンジョバエ) が死んでいた。 2. 雷鳥沢はその名の通り ライチョウが沢山いる。この時期まだオスはオス、メはメ 3. で行動とのこと。 										

● 体力度 = 1 級・とても楽 2 級・楽 3 級・普通 4 級・やや大変 5 級・大変 6 級・非常に大変 ● 技術度 = 1 級・とても易しい 2 級・易しい 3 級・普通 4 級・やや難しい 5 級・難しい 6 級・非常に難しい ● 展望度 = 1 級・とても悪い 2 級・やや悪い 3 級・普通 4 級・やや良い 5 級・良い 6 級・非常に良い

山スキー隊

集大成（御山谷ロングコースに挑戦する）

記録・加藤秀子

（前の記録は来生） 一の越発 8:00 ～黒部湖 10:00/10:15 発～ロッジくろよん11:15(昼食
(スキー滑降) (歩行)
・大休止) 11:42 発 ダム～室堂着13:10 ～BC着13:45 (後の記録は来生に続く)

一の越は突風が吹きまくっていた。スキー板を背負っているせいか、風がもろに当たる。耐風姿勢で踏ん張るがどうもよろけてしまう。一の越から登山隊は往路を下山の予定。スキー隊は御山谷を滑降していく。ここは、標高2,705mの一の越から標高1,450mの黒部湖近くまでの長さを滑り降りる事ができる、屈指の山岳スキーコースという事であるが、斜度のある谷間は広々と延々と先まで続いている。こんなロングコースは初めてだ。谷底から吹き上げて来る風が少し気になったが、腰を屈めて靴と板を滑りのモードにセットし始める頃には、胸がワクワク高鳴ってくるから不思議だ。

上部は未だガチガチのアイスバーンである。どう攻め込んでいこうか・・・生意気に思案をしていると『行くぞ!』と準備を終えたCLが横滑りで滑走を開始する。慌てて後を追いかける。横滑りが出来ない私は腰を落とし、足を踏ん張ってまるっきりのポーゲン体制だ。時々横滑りの真似を試みるがどうにも上手くいかない。両足を揃えてエッジをたてると板が止まってしまう。エッジを緩めると、アッというまに滑りはじめ体制が崩れる。如何ともしがたい。だが、どうにかポーゲンでこなしクラストした雪面を滑りきった。

中程迄下ると、腐り始めたザラ目状態の雪質に変わり、絶好調の滑りが始まった。自由自在にダイナミックなシュプールを刻む。もったいないとばかり、谷の端から端まで時計の振子のようにロングターンをする。脛をぴったり靴につけ前傾姿勢をとる。ターンはシュテム。『ウーん。いい!』身体全体が軽やかだ。身体中で風を切り、目の前の景色が流れていく。

ところが、段々と息が切れ始め『ハアハア、ハアハア』あぁしんど。疲れるも疲れた。太股がパンパンに張って辛い。モーレツに痛い。踏ん張る力も無くなって板がグラグラ揺れ動く。二つ三つ、ターンをしては一休みする私に『加藤でもそうか』とCLが失礼な言葉を言った。今までの山では余り感じなかったが、ロングではこんなにも体力が消耗するものかとおつくづく身にこたえた。スキーは登山以上に体力を必要とするものらしい。

下部になると谷が急に狭くなり、所々デブリがひどい。腰を落として左側の斜面をトラバース。今度は谷を渡りこんで右肩の樹林帯をゆく。急な斜面を、ブッシュに板をとられないように慎重に滑り込む。気がつくと谷底はとうとうと流れる川になっていた。黒部湖が見えると終

わりに近い。板を外し川を渡る。黒部湖を囲むように聳える針の木岳の岩峰が見事だ。湖畔に人影が2人。山中の湖は何か神秘的で心に残る。ここから黒部湖のトロリーバス乗場まで約1時間。もうひと踏ん張りだ。アップダウンのあまりない山道を板を担いで歩く。途中で『マンサク』の花をみつけた。春一番に『まんず咲くからマンサクだ』とCLに教えてもらったが、今頃咲くとはやっぱり春が遅い証拠です。黒部湖から又乗り継いでテン場へ戻る。

今回は、山スキーの一面を垣間見た思いがした。富士山二つ塚から始まって乗鞍、車山、巻機山、平標山、そして今回の剣沢・雷鳥沢・御山谷のロングコースと山スキーにはまっているが、どの山も一つとして同じ顔ではない。ゲレンデと違って圧縮してない雪は、いろんな表情を持ちアイスバーン、深雪、粉雪、デブリ、ブッシュと様々だ。地形とその雪の状態を早く見極めて、この雪質にはどういう滑り方をしようか、考えるのはとても楽しいものである。そして谷の端から端まで自由自在に奔放に滑る。まさに山スキーの醍醐味だ。

去年は板を担いで下りていた私を叱咤激励しながら、まがりなりにも滑る事ができる迄に指導してくれたCLに心から感謝して、又来年は更に・・・と夢を持ちたい。今年は残念ながら此れで終わりだ。



御山谷

ここは、日本最大の氷河跡といわれる
一の越から黒部湖まで、標高差1300mを滑降



バックは、龍王岳（2807m）

山行報告書

通算山行NO	No. 101S春山合宿・剣岳	報告者	来生博子
4/28	朝のうち無風・曇り のち みぞれ 午後 雨 のち 降ったりやんだり 夜 雨 6:00起床 7:00後藤、加藤出発(剣沢)…11:00帰着 8:00~10:30高岡、来生スキー練習 11:00以降 沈殿 20:30就寝	本日の天気予報 降雨 50% 午後 80%	
天侯・行動	3日		
後藤	一句・沈殿で我が人生振り返る	高岡	沈殿で思う、昨日の内に剣岳制覇感慨
加藤	雨降る前に剣沢、振り沢の滑降に満足	来生	この壮大な山の懐でスキーなんて幸せ!
<p>雷鳥とはのんびりと優しい姿に似合わず、とんでもない音声を張り上げる鳥で、なぜ、名前に雷が付くのか解る気がした。が、雌は呼ぶと鶏の様にコ、コ、コ、コ、と囁くような声をあげながら近づいて来る程無防備で可愛かった。</p> <p>雪の早朝は明るい。4時半ごろテントの近くで雨蛙よろしくグェー、グェーと低く響き渡る雷鳥の鳴声で目が醒める。これまで雷鳥が見られるという事は、天気が崩れる兆しなのだと思いき及んでいたがこの雷鳥沢に限ってそうでない事が解ったつもりだ。いつでもあちこちに間近で見ることが出来た。しかし、今朝の雷鳥の鳴声は、雨降り蛙とおんなじだ。天気予報を聴いているのでシュラフの中でまんじりともしない。6時、起きて昨夜の焼肉の残りやお茶漬けで朝食を摂る。空模様を見ながら予報を懸念して、今日のスキーを奥大日岳か剣沢かとCLは思案しきり。なんとか昼まで天気は保ちそうな気配。CLと加藤はスキーを担いで急ぎ剣沢へ向かう。私と高岡はテント内の片付けをして、この広い雷鳥沢でスキー遊びとする。2人が別山乗越に近づくのを見やって私達も板を履く。奥大日岳・別山・真砂岳・大汝山・雄山が衝立ての様に並ぶ広い広い雪原を繰り返すスキー歩行してはボーゲンの練習、斜滑降と2時間あまりも遊ぶとポツリと来た。CLと加藤の向かった方はどうやら霧の中。小さなあられは雨混じりになる。離れた所で練習の高岡とひどく降らないうちにテントに戻る。まもなく、CLと加藤も勢い戻り沈殿、これは良かった。大荷物の雪上歩行のうえ、でこぼこの雪上で決してゆっくり寝れたといえない2晩の疲れを充分に取る。加藤の「ちんでんってどういう字？」から少々山用語の意味を教えてもらう。デブリは雪崩の後の雪の固まりの事。沈殿は読んで字のごとし、加水分解してできる澱粉は下に固まる。雨の中、テントに固まる我々は正に沈殿物だ。</p> <p>テント村はどっぴりと沈殿。近くのテントからオカリナの音色が響く。目的のスキーを半分断たれたCLは外が気になって仕方がない。小降りになった雨の中滑り始めた人が居るといっては促す。沈殿もいいね。もう動きたくない、出たら濡れるもの。体力不足の疲れがとれ、こ</p>			

れまで以上の雄大な山、雪の剣に登り、今そのふところにゆったり居られる。とうとうやって来たのだ、感動を心ゆくまで伝え合い談笑のひとつき。ここまでこれた下積み山行を振り返る。反省あり、希望あり、地酒の旨い『銀盤』を飲み交わし、嬉しさが溢れる面々。

高岡も私も今回転ばずに滑れた。昨日手ほどきを受けた様に、ボーゲンを思い切りやってみた後開脚を十分に、大袈裟な程に重心を掛けた足を曲げてみた。雪質は良く、剣に来た甲斐があった。近くのもそり立った雪の垂直壁では、杭を打ちザイルで登攀訓練のパーティや、離れた急斜面で滑落停止訓練のパーティ、雪のブロックを積んだテントの数々、少ない女性、歯だけ白い人、綺麗なシュプールを描くスキーヤー達、一流の感じが漂う剣、登山を趣味として良かったと思う至極の山行である。

旨い『銀盤』が醒めたところで、雷鳥沢ヒュッテで3日振りの汗を洗い流し人間らしさを取り戻す。温泉は広く入浴のみ400円だった。聞くと素泊まり5,500円、2食付き1泊で8,300円という。来年は泊まらずしてなんとしよう。決して若くは無いのだから。

山行の思い出を振り返る



山行報告書

通算山行NO	No. 101S春山合宿・剣岳	報告者	来生博子
4/29	一日中快晴 山頂強風 5:00起床・6:10テント出…7:40一ノ越小屋 8:30後藤・加藤滑降開始 8:35高岡・来生テントに向かう 9:50テント干す 13:40後藤・加藤テント場着 14:25引き上げ 16:00室堂駅着—臨時便 16:15トロリー乗車〈大観峰行き〉 16:45ロープウェイ乗車〈黒部平行き〉 17:00ケーブルカー乗車〈黒部湖行き〉 17:30トロリー乗車〈扇沢行き〉—19:30大町着車中泊	天侯・行動	4日
<p>昨日の雨は止んだものの、近いうちに崩れる予報。CLは、テントを濡らして室堂迄約2時間の雪上歩行はとても大変なので、できれば今日のうちに撤収し下で車中泊がよいと提案。</p> <p>したがって、そのつもりでの行動をとる。4人で一ノ越から雄山を極め一ノ越に戻り、スキー隊は黒部へ向かい、高岡と来生はテントに帰り2人が戻るまで、テントを撤収しやすく干したり片付けたり、時間のかぎりスキーの練習だ。先行の単独者が雄山に登り始めたが、100M程登った所の急峻な雪壁で出っ張った岩の左右を、何度も何度も足掛かりを探っていたが遂にあきらめて降り、逆方向の龍王岳に向かった。我々も荷を置き雄山に取っ付く。雨後の強風は雪を氷にする。アイゼンが氷にしっかり食らい付き安定はあるが、左方から吹き上げる激風はじっとしていると歯がガチガチ鳴る。少しでも治まる気配はない。この状態の山は私の山ではないので潔く振って、下で待つ事にした。ピッケルを持っていないCLと加藤、高岡はやはり、引き返した単独者と同じ所で同じようにトライしていたがあきらめ、引き返してきた。</p> <p>その後、果敢な男性4人が同じ様に挑んでいたがそこをあきらめ、慎重に左に廻り風を真後に受けるルートを取り、岩の突き出た雪稜をゆっくり登っていった。一ノ越にはスキーヤーや登山者が次々と登ってくる。そして冷たく強い風に行動を思いあぐねているようだ。CLと加藤はそんな人達を尻目にスイーッと御山谷を滑り始めた。他のパーティが慎重でなかなか後に続かないので高岡と私はテントに向かう。一ノ越ルートは多くの人達とすれ違い、陽が上がる、広大な白銀の世界はまぶしく幻想的だ。風も止み汗ばんできたがほんの少しでも素肌を出すことは許せない。ペルーのゲリラにゴーグルを着け完全武装。雨に降られた奥大日岳の雪庇はえぐれてビッグウエーブの様だ。いつ崩れても不思議でない状態にせりだした。</p> <p>テント場近く、こんな日のスキーヤーはいなかった。雪がふやけ10センチ程も沈み、全く滑らない。1時間も頑張ったがうんざり、テント内を干し荷物をまとめてスキーの2人を待つ。</p> <p>バイタリティ溢れる2人は戻ると、すぐに帰り支度を始める。減る筈の荷物は減ってないばかりか来たときより重い、絶対。緩やかだが30kg近い荷を背負い1、5Hの登り返しは例え</p>			

様もなくきつく、声もでなければ脇目も振れない。ひたすら前に出る足が無意識の内に追うのみ。室堂駅に近付き、優しいCLはザックを背負いに戻ってくれ、空身で歩くが、糸の切れた風船の様にふわふわして、この身ここに在らずでお礼のことばも発せず全く甲斐性なし。

御蔭で臨時の終車便に余裕を持って乗る事ができ本当に有り難かった。乗り換えが多いので余裕が必要だ。乗り物全て最終便で扇沢に到着。CLも若い頃以来の重量を背にし、疲れも頂点だったろうにここでも、休むまもなく車を大町まで走らせる。今夜は久々に食事処でちゃんとした美味しい食事を文字どおり貪り、天気が崩れる前に山を下り、楽在れば苦あり苦在れば楽ありの剣山行に談を咲かし、辛さの限界を味わうも健康であるからできたのだと喜ぶ。改めて偉大な剣岳に抱かれ気の抜けるような感動が込み上げるのをじっと噛み締める。そして、メンバーがいつでも健康であることを望み、決して自分の為に迷惑をかけてはならない事を誓う。

大町の街路はこのゴールデンウイークにアルペンルート開通の旗で賑わっていた。駅の駐車場で無防備にも車の脇に荷物を全て出し車中泊となる。いつもながら喉元過ぎれば熱さ忘れるで星や月を見ながら、明日天気がよかったら帰るのは勿体ない…辛さも忘れて思う。

山行の思い出 - 辛さの限界を味わうも健康であるからできたのだと喜ぶ。改めて偉大な剣岳に抱かれ気の抜けるような感動が込み上げるのをじっと噛み締める。そして、メンバーがいつでも健康であることを望み、決して自分の為に迷惑をかけてはならない事を誓う。